
ウルトラマンレオ～私がハヤテですわ～

天王州 アテネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルトラマンレオ〜私がハヤテですわ〜

【Nコード】

N9549K

【作者名】

天王州 アテネ

【あらすじ】

ウルフ星人との戦いで踏み殺された綾崎 ハヤテ。ウルトラマンレオである天王州 アテネは彼に命を与えるために彼と一心共同体になって……。

1・再会ですわ（前書き）

アテネですわ。

この世界では私はウルトラマンレオなんですの。そんな私がやりた
い放題と大暴れ。

兎に角楽しいのでどうぞよろしくお願い致しますわ。

1・再会ですわ

私の名は天王州 アテネ。^{わたくし}十年前に獅子座し77星からやってきた宇宙人。この美しい地球に飛来した時、私はこの金髪縦ロールの端正な顔立ちの少女の姿を取った。

「アーたん？」

特に目的もなくギリシャの街をぶらぶらしていると、背後から何者かが駆け足で近付いてきた。

「君アーたんだよね？」

「何ですか？」

立ち止まり様に振り返ってみると、水色短髪の女の子のような顔付きの少年が立っていた。

目の前のその少年はとても可愛くて私の心臓を高鳴らせた。

「やっぱりアーたんだ！」

少年はいきなり私を抱き締めた。

「ちよつといきなり何するんですの！？」 ていうか私は貴方のことは知りませんわ！」

少年は私を解放した。

「もしかして人違い？」

「うん」

私は頷いた。

「そっか……」

少年は残念そうに肩を竦めた。

「アーたんだと思ったのに……」

「あの……そのアーたんというのは誰なんですか？」

「十年前から思いを寄せている女の子さ。君にそっくりで可愛かったな……」

「もしかしてその子のことが忘れられないの？」

「うん。だから君を見て、凄く嬉しかった」

「それで告白しようと声をかけたのね？」

「うん」

「因みにその子の名前は何ていうんですの？」

「アテネだよ」

「えっ……？」

私は思い出した。十年前、日本の杉並にあつた王族の庭城ロイヤルガーデンという崖つぷちに建つお城で一人の男の子と暮らしていたこと、ある事情でお互い決別して離れ離れになったこと、その男の子が綾崎 ハヤテという名前であること、そして彼に”アーたん”と呼ばれていたことを。

「もしかしてハヤテ？」

ハヤテに面影のある目の前の少年に訊ねると彼は問い返した。

「やっぱりアーたんなの？」

「ハヤテ！」

私はハヤテと思しき少年に抱きついた。

「逢いたかった」

私は確信した。この少年がハヤテなのだと。

「ハヤテえ……」

ハヤテの胸を私の嬉し涙で濡らす。

「アーたん、あの時はごめんね」

「いえ、私の方こそ貴方をあんなにしまつてごめんなさい」

私はあの日、激昂してハヤテを血だらけにしまつた。それはもう死んでしまうのではないかと思うぐらい酷い怪我だった。

「アーたんのせいじゃないよ。あれは君の大切な獅子を象つた指輪を親に預けてしまつた僕が悪いんだ」

ハヤテ曰く獅子を象つた指輪はレオリングとって私の命より大切なものだ。あれがないと私は超人になれないのである。それを彼は親に言いくるめられて奪われた挙げ句に質屋に売られてしまったのだ。

「最低だよね、僕」

その通りだ。

「だからさ、今ここで僕の命を奪ってくれるかな。あの時、アーた
んは僕を殺すつもりだったんでしょ？」

「うん……って、はあ!？」

何を言ってるんだこいつは!？」

「アーたん、僕を一思いに殺して。それで僕は君に償うから」

「いやいやいやいや! そんなこと言われても困りますから! そ
れにもう怒ってませんわ!」

「本当に?」

「本当ですわ! 貴方のこと赦してあげます!」

「アーたん……」

ハヤテが私を抱き締めた。

「それにしても、こうしてみるとアーたんって小さいね」

「何ですって!?! こう見えても女性としての部分はちゃんと大き
くなってますわ!」

私のアホ毛がハヤテの頭をビスビスと突つつく。

「痛いよアーたん。ていうかそれどうなってんの?」

「超能力ですわ!」

「いや、超能力はウルトラマンしか使えないからね。ところで、君
は僕のことどう思ってる?」

「へ? どうって?」

「さっき言ったよね? 十年前から思いを寄せてるって」

「そう言えばそうでしたわね。もちろん私も同じですわ」

「それじゃあ……」

「ええ、犬にしてあげますわ」

「えっ、犬?」

「ハヤテ、貴方が私の彼氏になろうなんて十万年早くてよ」

「そんな……」

ハヤテは私を放して膝を着いた。

「ハヤテくん」

そこへ金の髪留めをした桃色長髪の端麗な少女がやってきた。

「あ、ヒナギクさん」

「急に駆け出すから心配しちゃったわよ。どうしたの一体？」

「すみません。別に何でもありません」

「そう。……あら？」

少女が私に気付いた。

「どうして天王州さんがここに？」

彼女は桂 ヒナギク。日本国東京都杉並区にある私立白皇学院の二年生で生徒会長兼剣道部部长だ。

「ヒナギクさん彼女を知ってるんですか？」

「天王州さんは白皇のOBで現理事長よ。知らなかったの？」

「そうなんですか……って、ええ!？」

驚き飛び上がるハヤテ。

「それで、天王州さんがどうして？」

「仕事の都合で来ただけですわ。桂さんこそハヤテとはどういう関係ですの？」

「クラスメイトよ」

「それじゃあハヤテは白皇くわの生徒？」

「そういうことになるわね」

こんなに近いところに居て何で気付かなかったのだろう。

「天王州さんこそハヤテくんとはどういう関係なの？」

「幼馴染みですわ」

「じゃあ貴方がハヤテくんがずっと思いを寄せている人なのね」

桂さんがハヤテを見据える。

「再会出来てよかったわね」

「ちっともよくないですよ」

「どうして？」

「だって、だってアーたん犬にするって言うんですよ。僕はアーたんの彼氏でいたいのに」

「貴方には犬がお似合いよ」

「ヒナギクさんまで!？」

「じゃあ私は皆のところへ戻ってるから、大好きなご主人様とお散歩を楽しんできなさい」

桂さんはそう言って立ち去る。

「ちよつとヒナギクさん!」

私は首輪を取り出すとハヤテの首に巻いてリードを繋ぐ。

「ちよつと何するの？」

「飼い犬だから首輪をつけてあげたの」

「アーたんは本気で僕を犬にする気なんだ？」

「だって昔飼ってたロンに似て可愛いんですもの」

「ロンって？」

「小型の可愛い怪獣ですわ」

「えっ？」

「さあ、行きますわよ」

私はハヤテを連れて歩き出した。

建ち並ぶ数々のお店。その一角のショーウィンドウの向こうに値札の貼られたレオリングと思しき物が置いてあった。

「ハヤテ、あれ」

「何？」

私の指差した先に目を向けるハヤテ。

「あの指輪は!」

ハヤテは慌てて目の前のアクセサリショップへ入ろうとするが、リードにそれを阻まれた。

「アーたん、これ外していい？」

「どうして？」

「もちろんあの指輪を」

私がハヤテから首輪を外すと、彼は店内へ入っていった。そして数分に戻ってきた。

「ごめんねアーたん。店員さんに頭下げただけでもらえなかったよ。どうしても欲しければ日本円で一億五千万は必要だって。僕の

借金と同じ額だよ」

「貴方そんなに借金を抱えてるんですの!？」

「うん、お嬢様にね。返済まで凡そ四十年だよ」

「お嬢様？」

「僕、執事をやってるんだ。練馬の三千院の家に住むナギお嬢様」

私の頭に金髪ポニーテールの生意気な女の子の顔が浮かぶ。

「帝の孫ですか」

「お祖父さんも知ってるの？」

「ええ、理事会でお会いしますので。それより、今はあの指輪ですわ」

「あんな高いのどうにもならないよ」

「あれに値段を付けるなんて間違ってますわ」

私がガラスに両手をあてがってレオリングを睨め付けていると、店員がそれを持って行き、少ししてそれを薬指に填めた男が出て来た。

「そこの人」

私は男に声をかけた。

「何だ？」

振り返る男。

「その指輪、見させていただけませんか？」

「別に構わんが」

男がレオリングを近付けてきた。その目の部分に獅子の瞳という地球には存在しない赤い宝石が埋め込まれていることから本物であると判断出来る。

「これ譲っていただけませんか？」

「何言ってるんだ!？ これは俺が一生懸命貯めた金で買ったんだ！手放せる訳がないだろ！」

男はそう言いながら手を引つ込めた。

「そこを何とか」

両手を合わせて頭を軽く下げる。

「ダメなもんはダメだ！」

「ちっ！」

「何だ今の舌打ちは!？」

「アーたん！」

ハヤテが私を後ろに引つ張って前へ出る。

「すみません」

男は立ち去っていく。

「待ちなさい！」

追いかけようとする私をハヤテが羽交い締めにする。

「嫌だつて言ってるんだから諦めなよ」

「あれには私の力が封印されてますのよ！」

「それがどんな物かは分からないけど、そこまで欲しいなら何とかするよ」

そう言つてハヤテは男を追い掛けた。

「すいません、その指輪下さあい！」

ハヤテは男を張り倒すとレオリングを奪い取った。

「何すんだよ!？ 返せ！」

男が立ち上がつてハヤテに攻撃しようとする。

「アーたん、パス！」

ハヤテが投げたレオリングを私は右手でキャッチして左手の薬指にはめた。

「それ返せ！」

男が私へ突進してくる。

「これは元々私の物だ！」

私は眼前まで迫つた男を蹴脚で吹っ飛ばした。

「ぐわっ！」

地面に転がる男。

「男を吹っ飛ばすなんて凄いなアーたん」

「てめえ！」

立ち上がった男が懷から銃を取り出して発砲した。

「アーたん！」

弾丸は私の体に当たると同時に足下へ落下した。

「ばっ、化け物！」

男が銃を連射。次々に足下へ落ちる無数の弾丸。

「それ以上はやめといった方が身のためですわ」

「う、うわああああ！」

男は脱兎の如く逃げ出し、代わりにハヤテが駆け寄ってくる。

「アーたんの体どうなってるの？」

「日々鍛えてるお陰で丈夫になってしまったのですわ」

ハヤテが私の服をめくり上げた。

割れた腹筋。逞しいその肉体には流石のハヤテも驚いた。

「凄いや！」

ハヤテが本気で私のお腹を殴ってくるが、全然効いていなかった。

「そのへなちょこパンチは何ですの？」

「可笑しいな。僕も鍛えてるのに」

「鍛え方が違いますのよ。それより、せっかく再会したのですから、楽しいところへ行きましょう？」

「うん。でもどこへ？」

「あ……」

何も考えていなかった。

「兎に角歩きましょう」

「うん」

「きゃああああ！」

私たちが歩き出そうとすると、どこからか悲鳴が聞こえてきた。

「あっちですわ！」

私たちが悲鳴の下へ駆けつけると、女性を襲う二本足で立つ茶色の狼を目撃した。

狼は女性に噛みつき、血を吸い尽くして殺すとどこかへ逃亡した。

「今の日本に出没した怪物だよ」

「ウルフ星人ですわね。聞いてますわ」

「わざわざミコノスにまでやってくるなんて、一体何が目的なんだろう？」

女性しか襲わないという奴の習性から導き出される答えは恐らく地球人女性根絶やしによる少子化。全ての女性を殲滅して新たに子どもが誕生しないようにして人類を滅ぼそうと考えているのだろう。いずれ私の番が回ってくるかも知れない。

「アーたん、僕帰るよ。ヒナギクさんたちが狙われるかも知れないから」

的確な判断をしたハヤテが私の下を去ろうとする。

「ハヤテ、ウルフ星人には絶対に手を出すな。これは命令だ」

「そんな、黙って見てらんないよ。僕には三千院家の執事として皆の命を守る責任がある。それじゃあ」

ハヤテは駆けていった。

「ハヤテ！」

私はハヤテを追いかけた。

もしハヤテがウルフ星人と戦闘なんてことになったら間違いなく殺される。仮に運良くそうならなかったとしても、奴は巨大化して街に被害が出るのは確実だろう。どちらも避けなければならいことだと私は判断した。

「待つてハヤテ！」

鍛え上げられた脚力で出した速度でハヤテに追い付いた。

「私も行きますわ」

「ダメだよアーたん！ 女の子を危険な目に遭わせることなんて出来ない！ 等身大ならまだしも、巨大化したら適いつこないって！」

「大丈夫ですわ。人間の力ではどうしようもなくなった時、いつもウルトラマンが助けてくれてたではありませんか」

「だからと言ってウルトラマンがギリシャにまで飛んでくるとは限らないんじゃないかな」

「心配ありませんわ。ウルトラマンなら……」

やはり正体は隠しておこう。週刊誌にでも掲載されて騒がれたら困るからな。

「何でもありませんわ。兎に角急ぎましょう」

人混みの中を縫うように駆け抜け、町外れの大きな一軒家へとやってきた。

中庭で桂さんがウルフ星人と対峙している。

「私を襲おうなんて百年早いだよ」

桂さんが木刀正宗を手にウルフ星人へ攻撃を仕掛ける。

「ヒナギクさん！」

ハヤテが戦場へ乱入。

「ハヤテくん!？」

「僕も手を貸します」

「助かるわ」

私は離れた場所から戦いの様子を見る。

星人と睨み合う二人。

星人が先に動いた。

二人はサイドステップで星人の攻撃をかわして透かさずカウンタ―を浴びせる。

怯む星人。そこに二人の追撃。

二対一の戦いで完全に追い詰められたウルフ星人は遂に巨大化した。

「ハヤテくん、みんな……!？」

桂さんの頭上に全長五十メートルはある狼の足が迫った。

私は駆け出すと踏みつぶされる寸前のところで桂さんを助け出した。

「天王州さん」

「桂さんは安全なところへ逃げて下さい」

「逃げるなんて出来ない、と言いたところだけど、こんなにでかかったら無理ね。天王州さんは？」

「戦いますわ」

「無理よ。潰されるのがオチだわ」

「大丈夫ですわ。死にませんから」

「天王州さん……」

桂さんは躊躇ったが、逃げていった。

さて、後はハヤテだけか。

「ハヤテ、貴方も逃げて下さい」

「嫌だ」

「どうしてですか!?」

「言ったでしょ？ 僕は執事だって」

ハヤテがこちらを向いた瞬間、彼は星人に踏みつぶされた。

「ハヤテ！」

星人が足を上げると、ハヤテがそこに倒れていた。

「ハヤテ……」

ハヤテを凝視すると、呼吸をしていないことが分かった。

「ハヤテ！」

私はハヤテに駆け寄って脈を確認した。

「そんな！」

胸に耳をあてがうと心臓が止まっていた。

私はハヤテの脳に直接語りかける。

「ハヤテ、私の声が聞こえますか？」

「アーたん……アーたんなの？」

「ハヤテ、私は自らを犠牲に戦う貴方の勇氣に狂信する個性を感じましたわ。貴方と一心同体となってその命を生きながらえさせてあげましょう」

私はハヤテの体内に入り込んだ。

目を開けて起き上がるハヤテ。

「生きてる？」

「ハヤテ、あの星人と戦うのです」

「アーたん!? どこに居るの!?」

「貴方の中ですよ」

「僕の中？」

『左手の薬指を見て下さい』

ハヤテが左手の薬指を見る。

「これアーさんの指輪！？」

『来ますわ！』

ハヤテが星人の踏みつぶし攻撃をかわす。

『私の名、"レオ"と叫んで下さい』

「れ、レオ——ッ！」

ハヤテが叫ぶと、獅子の瞳が輝き、彼は「i3963—671<」という白銀のシークレットサインが腹部にある全長五十二メートルの赤い巨人に変身した。その名はウルトラマンレオ。私の本来の姿である。

「こ、これは一体！？」

驚き戸惑う私の姿をしたハヤテに星人が攻撃を仕掛けた。

「ぐわっ！」

地面に転がる私の体。

『仕方ありませんね。今回は特別ですわよ』

私は立ち上がり、星人に攻撃を仕掛け、怯んだところに繰り返し追撃を浴びせて圧倒していく。

やがて星人はグロッキーになる。

「とどめですわ！」

私は空中へ高く飛び上がると、その場で前方にクルリと一回転して赤く光り輝く右足を星人に叩き込んだ。

星人が倒れ、大爆発を起こすのと同時に辺りに無数の肉片が飛び散った。

私はハヤテの姿になってその体を彼に明け渡した。

「アーたん、君は何者なんだ？」

『ウルトラマンレオですわ』

「どこから来たの？」

『獅子座し77星ですわ』

「ハヤテくん！」

桂さんがこちらへ駆けてくる。

「怪獣は？」

「ウルトラマンレオが倒してくれました」

「ウルトラマンレオ？」

「赤一色の巨人で獅子のようなウルトラマンです」

「そう。ところで天王州さんは？」

「あ……えっと、アーたんなら急用を思い出したからって先に」

「そうなんだ。あ、そうだ」

「なんですか？」

桂さんは辺りをキョロキョロと見渡すと言った。

「一度しか言わないから聞き逃さないでよ」

「はい」

「私、ハヤテくんが好き！」

あらま。

「えっと……ごめ」

そこまで言い掛けたところで私がハヤテの口を強制的に閉じる。

（何するんだよアーたん？）

私はハヤテの口と声を使って言う。

「そうですか。じゃあ付き合いますか？」

「ほえっ？」

桂さんが疑問符を浮かべた。

「どうしたんです？」

「てつきり断られるかと思ったんだけど。えっ？ 本当にいいの？」

「ヒナギクさんなら大歓迎ですよ。でも意外だな。僕のこと怒ってばっかいるヒナギクさんが僕のことを好きだったなんて。いつからなんですか？」

「ハヤテくんと初めて逢った日からよ」

「そんなに前から。気付かないですみませんでした」

（ちよっとアーたん、一体何を？）

『黙って見てなさい』

「いいのよ別に。それで、本当に私と付き合ってくれるの?」

「嘔吐いてどうするんですか?」

「ハヤテくん……」

『面白くなってきましたわね』

(……………)

「ヒナギクさん、実を言うと僕もヒナギクさんのことが好きです。というかさつき好きになりました」

「はあ?」

「狼と戦うヒナギクさんの姿がとても格好良くて惚れてしまったんです」

(やめてよアーたん!)

「有り難う。私の虜になってくれて嬉しいわ。よろしくね」

『よかったわね、ハヤテ。こんなに可愛い女の子が貴方の彼女になつてくれたのよ』

(僕はアーたんの方が……)

『ハヤテ、貴方は桂さんと付き合いなさい』

(……………)

ぐう、とお腹が鳴った桂さんは頬を赤らめた。

「何か作りましょうか?」

「本当に? じゃあハンバーグをお願いしようかな」

「分かりました。食堂で待ってて下さい」

私は家に入るとキッチンへ直行し、手作りハンバーグを食堂で待っている桂さんの下へ持って行った。

「随分早いね」

「ヒナギクさんがお腹を空かせてたので急ぎました。どうぞ召し上がって下さい」

「いただきます」

桂さんが私の手料理を美味しそうに食べる。

「ごちそうさま」

あつという間に完食。

「美味しかったわ。また作ってくれる？」

「もちろんですよ」

（アーたん、いい加減にして！ 僕の体で遊ばないで！）

『もう少しだけ貸して下さらない？』

「ヒナギクさん」

「何？」

「お弁当くつついてますよ」

「嘘！？」

「取ってあげます」

私は桂さんの頬にくつついているご飯粒を取って口に放って飲み込んだ。

桂さんが怪訝な顔をする。

「何です？」

「貴方、本当にハヤテくん？」

「僕がハヤテじゃなかったら誰なんですか？」

「……そうよね。ごめんね、変なこと訊いて」

バレるかと思った。

（アーたん、お願いだから返してよ）

『この体気に入ったので暫く私が借ります』

（ふざけんな！）

『貴方が怒ったところで何も出来ませんわ』

（くっ……！）

「ねえ、ハヤテくん」

「明日の飛行機、私の隣に座ってくれない？ そうすれば高いのも平気な気がするわ」

「分かりました。そうします」

「有り難う」

桂さんは部屋を出て行った。

私は後片づけ済ませると、ハヤテの部屋へ向かうのだった。

1・再会ですわ（後書き）

ハヤテの体に乗っ取ってしまいました。
彼は一体どうなるんでしょう？

2・レオ兄弟対二人のアトランタ星人

東京国際空港に三千院家所有の飛行機が着陸。タラップが接続され、私たちは地上に降りた。

「もう飛行機なんか乗らないんだから」

「ヒナギクさんは本当に恐がりですね」

「怖いに決まってるでしょ、あんな高いところ」

「じゃあ今度は低いところを旅行しません？」

「低いところ？」

「海の中とか」

「いいわね。でも無理よ」

「あはは、確かに」

「おい、お前から前より仲良くなってるじゃないか？」

背後でナギが訊ねる。

「そう見える？」

「実は僕たち昨日から付き合い始めたんです」

「何——っ!？」

「私の方から告白したのよ。そしたらオツケイって」

「ふざけるなハヤテ！ お前は私の執事だろうが！」

「じゃあ今日でナギさんの執事を辞めて、ヒナギクさんの執事になります」

（ちよつとアーたん!？）

「ハヤテくん!？」

「ほう、そうかそうか。そんなにヒナギクがいいか。ならば勝手に出て行くがいい。もう二度と戻ってくるな」

「ハヤテくん、いいんですか？」

「ええ、いいんです」

私はメイド服の少女の問いにそう答えた。

「という訳でヒナギクさん、今日からよろしく願いしますね」

「ええ!？」

「嫌なんですか？」

「別にそうじゃないけど、いきなり来られるのはちょっと……」

「嫌じゃないなら決定ですね」

「ハヤテくん、昨日から様子が変よ。熱でもあるんじゃない？」

桂さんがハヤテのおでこに手をあてがう。

「別に熱はないみたいね」

(ヒナギクさん、助けて下さい)

『無駄ですわよ、ハヤテ』

「まあいいか。ハヤテくん、後でうちへ来なさい。部屋を用意しておくわ」

「有り難う御座います」

——というようなことがあってから数日後の朝、私は桂家のキッチンで朝食を作っていた。

「お早う、ハヤテくん。貴方が来てくれたから主婦の私は助かるわ」
若くて綺麗な茶髪の女性がやってきて言った。

「お早う御座います、お義母様」

この方は桂さんの義母。詳しいことはよく知らない。ハヤテに訊こうとしたが、教えてくれなかったのだ。

「お早う」

桂さん、元いヒナギクさんがやってきた。

「お早う、ヒナちゃん」

「お早う御座います、ヒナギクさん。朝食作ってますので少し待って下さいね」

「うっん、時間がないから要らない」

「ダメですよ、ちゃんと食べなきゃ。倒れたらどうするんですか？」

「早くしないと遅刻しちゃうわ」

そう言っヒナギクさんは家から出て行ってしまった。

ヒナギクさんは今日、銀杏商店街の喫茶どんぐりでバイトがある。後で遊びに行こう、うん。

（アーたん、ヒナギクさんの邪魔しちゃダメだよ。ていうか僕の体早く返して）

『ハヤテ、貴方は誰のお陰で生きられていると思ってますの？』

（……アーたんのお陰）

『ですわ。文句を言うのでしたらこの体を出て行きますわよ。そう
なったら貴方はどうなりますかね？』

（死にたくないよ僕）

『でしたら素直に私の命令に従ってればいいのですよ』

（……分かったよアーたん）

と、同時に朝食が完成。

「お義母様、出来ましたよ」

「まあ今日も美味しそうね。ハヤテくんになら安心してヒナちゃん
を任せられそうだわ」

「彼女を僕にくれるんですか？」

「ハヤテくんになら喜んで上げるわ」

お義母様は食卓へ向かう際にこう言った。

「ヒナちゃんのこと守ってあげてね、ウルトラマンレオさん」

「……！？」

どこでバレた？

「お義母様、どうしてそれを？」

「何で貴方の正体を知っているか、気になるわよね」

どっかと椅子に座るお義母様。

「実は私も獅子座出身なの。それで分かったのよ。まあ、貴方みた
いに怪獣と渡り合えるほど強くはないけど」

「そうですか。では私と二人っきりの時はアテネと呼んでいただけ
ますか？」

「え？」

「この体は私のじゃないんです」

「そうなの。分かったわ、アテネちゃん」

私は出来上がった料理をお義母様の下に運んだ。

「ではお義母様、ちよつと出掛けてきますね」

「どこへ行くの？」

「愛するご主人様の下へ」

お義母様が無言でにやつく。

「何ですか？」

「レズビアンね」

「いけませんの？」

「そんなことはないわよ。それじゃあ行つてらっしゃい」

「はい」

私はお義母様に見送られながら喫茶どんぐりへとやってきた。

ここに愛しのお姫様が居る……。あ、でもこのまま入ったらあれだよね。

私は近くの洋服屋に入ると、女物の服を購入してそれに着替える。

『似合つてるじゃないハヤテ』

（やめて！）

『照れないの』

（照れてない！）

論争に飽きたので喫茶店内へ入る。

「いらつしゃいませ！」

ご主人様が笑顔で頭を下げた。

私は空席を適当に選ぶとそこに座つてメニューを見据える。

「コーヒーをブラックで」

「かしこまりました！」

ヒナギクさんがコーヒーを手早く用意する。

「お待たせ致しました。ごゆっくりどうぞ」

私はコーヒーを口に運ぶ。

「ブーッ！」

あまりの甘さについ吹き出してしまった。

「ブラックをお願いした筈ですけど？」

「お願いだから帰って」

「はあ？」

「帰れって言っただけなのが分からないの？」

「何ですか？」

「だって一緒に居るのを見られたら恥ずかしいじゃない」

「もしかしてバレてる？」

「バレバレよ。それにしても貴方にそんな趣味があつたなんてね」
クスツと笑うヒナギクさん。

「どうして分かったんですか？」

「顔。ハヤテくんみたいなイケメン、他に居るわけじゃない」
この男がイケメン？

「ぶはっ！」

「何が可笑しいのよ？」

「いや、普通この顔は可愛いというわけではありません？」

「確かに女装させたら可愛くなりそうだけどね」

「えっと、じゃあ僕は帰ります」

私は店を出た。目の前にはハヤテが以前に通っていた潮見高校の
クラスメイトの西沢にしざわ 歩あゆむが立っている。

「ハヤテくん、その格好は何かな？」

「な、何でもあります。失礼します」

私は慌ててその場を去り、負け犬公園までやってきて着替えを済ませた。

（アーたん、もう気が済んだでしょ？ 僕に体を返して）

『返しません。この体は私がもらいます』

（そんな……）

私は取り敢えず帰路に就いた。

閑静な住宅街の一角にある桂家。私はその家に入る。

「ただいま戻りました！」

奥からお義母様が姿を現した。

「お帰り、アテネちゃん」

「ご主人様に追いつ返されてしまいました」

「あれま。それはそうと、アテネちゃんはヒナちゃんのどこが好きなの？」

「強くて負けず嫌いで男っぽいところです」

「ヒナちゃんって男っぽいかしら？」

「男より男らしいですわ。お陰で女子はメロメロ。毎日下駄箱に沢山のラブレターが入ってますわ」

「凄いわね」

「じゃあ私、二階に行ってますので」

お義母様の下を離れた私は階段を上って二階の一室へ入る。

☆You've got mail☆

メールを受信。私はハヤテの携帯を取り出して受信箱を見た。

差出人はヒナギクさん。件名はなし。本文に”助けて”とだけある。

私はアドレス帳からヒナギクさんの携帯の番号を表示して通話を押し耳にあてがう。二回のコールで相手が応答した。

「女は預かった。殺されたくなければこれから指定する場所に来い」

「貴様は誰だ!？」

「俺はアトランタ星人。場所は白皇の屋上だ」

私は携帯を仕舞うと家を飛び出し、住宅街を駆け抜けて杉並の白皇学院へとやってきた。

新校舎の屋上に十字架が建っており、そこにヒナギクさんが縛り付けられている。

私は校舎に入って屋上へ上った。

「ハヤテくん！」

縄から抜け出そうと必死のヒナギクさん。傍らには黒服の男が立っている。

「ヒナギクさんを放せ！」

「嫌だね」

男は念力でハヤテの体を宙に浮かべる。

「ほらよ」

ハヤテの体は横へ吹っ飛び、フェンスを越えて校庭に落下した。
「ぐわっ！」

星人が私の前に降り立つ。

私は徐に立ち上がった。

「あの高さから落ちて生きているとは、流石はウルトラマンレオだな」

「貴方の目的は何ですの……？」

「ある方の命令でお前を殺しに来た」

「それでヒナギクさんをさらって僕を誘き出したって訳か」

「そういうことだ」

私は男に殴りかかった。

「うわっ！」

吹っ飛んで地面に転がる男。

「いきなりかよ？ 容赦ねえな」

男はそう言う人と人型の怪獣へと変貌した。

「変身して挑んでこい、ウルトラマンレオ。そして俺に殺される」

私は屋上を見た。そこからはヒナギクさん側からも私のことがよく見える。

「ちよつと待つてろ。今ウルトラマンレオを呼んできてやる」

「お前じゃないのか？」

「僕はただの地球人だ。いいな？ そこから一步も動くなよ」

私はそう言っただけで、たん校外へ出ると、人気のない場所へ移動した。

「レオ——ッ！」

両腕をエックス字にクロスした後、左手に握り拳を作って前へ突き出した。

獅子の瞳が輝き、ハヤテの体が私の姿になった。

「ようやく現れたか」

私は振り返ると、星人と見つめ合った。

「かかってこないのか？ ならばこっちから行くぞ」

星人の先制攻撃。

「ぐっ……！」

重いパンチを食らって私の体が後退する。

「おら！」

星人の追撃。

一つ一つの威力が高い！

私は攻撃を受ける度に蹠踉^{ひたひた}めいてカウンターを浴びせることが出来ず、次第に追い詰められていった。

「そろそろ楽にしてやる」

星人は私をはり倒してマウントで首を絞める。

呼吸を止められて苦しくなる。

「このまま窒息死しろ」

私は力を振り絞って首から手を退けると、転がって横たわった星人の上に跨ってその顔面を殴りまくる。

星人は私の拳を受け止め、マウントポジションから抜け出した。

私は立ち上がった星人をドロップキックで倒す。

「ひゃっはー！」

どうやら別のアトランタ星人がもう一匹居たらしく、私は背後から不意打ちを食らって蹠踉^{ひたひた}めいた。

後ろのアトランタ星人が私を羽交い締めにして動きを封じ、正面のアトランタ星人が木偶の坊と化した私を殴り放題。

やがて私はグロッキーに陥り、カラータイマーが点滅を始める。

背後のアトランタ星人が私を捕まえて飛び上がり、私を地面に叩きつける。

「がはっ！」

墜落の衝撃でバキバキという嫌な音が鳴ると同時に胸に激痛が走る。肋骨の二、三本は折れているだろう。

「くっ……！」

覚束無い足取りで立ち上がり、目の前のアトランタ星人へ向かっていく。

「おいおい、死ぬのが怖くないのかよお前？」

「こっちはそのぐらいの覚悟は出来てる。だから戦えるんじゃないかねえか」

私は目の前の敵を殴るがダメージはゼロだった。

「お前じゃ俺たちは倒せねえぜ」

「残念だったな、ウルトラマンレオ」

絶望というものを感じた私は膝を着いた。

「あ？」

その時、一本の光線が正面のアトランタ星人を粉碎した。

「誰だ！？」

私と背後のアトランタ星人は光線の飛んできた方を見た。その先には私によく似た >i3964—671< の男が浮いていた。

彼は双子の弟アストラ。私と同じくL77星の王子として生まれたが、そんなことはどうでもいいと思っている宇宙の冒険家だ。今まで数々の星間飛行をしてきた彼と会うのは十年振りだった。

「すっかりしてよ兄さん。そんな雑魚にやられてるようじゃ地球は守れないよ？」

アストラが急降下して着地する。

「久しぶりに会って第一声はそれか」

「どうでもいいけど、あいつ逃げちゃうよ？」

星人を見ると背中を向けて離れようとしていた。

「ちよつと待て！」

「ひいひい！」

驚いて背中が張る星人。振り向いて言った。

「か、勘弁して下さい！俺はまだ死にたくないです！」

「お前に訊きたいことがある」

「はい！何でしょう！？」

「お前に俺の抹殺を依頼した奴は誰だ？」

「ジユダ様です」

「何！？」

「因みにジユダ様はあそ……ぎゃああああ！」

突然の落雷により星人は何かを言い掛けたところで死亡した。

私は辺りに眩い光を放ち、その隙にハヤテの姿になってヒナギクさんの前に降り立った。

「ハヤテくん、いつからそこに？ ていうか体平気なの？」

「今来たんです。体の方は肋骨が二、三本折れてるみたいですけど、何とか大丈夫です」

私はヒナギクさんを十字架から解放した。

「本当に大丈夫なの？」

「はい、大丈夫です」

「でも一応、病院には行くわよ。何か遭ってからじゃ遅いんだから」
私はアストラを見る。

「あのウルトラマンは？」

「レオの双子の弟でアストラです」

「じゃあさつきボロボロにやられてたのがレオね。とても弱いじゃん」

「これじゃ地球の平和は守れませんね」

「じゃあ強くなりなさい」

「何で僕に言うんですか？」

「そうよね。変なの」

私たちの笑い声が辺りに響いた。

2・レオ兄弟対二人のアトランタ星人（後書き）

勘のいい人は気付いてるかも知れませんが、ヒナギクさんがジユダです。そしてレオの正体も知ってます。

3 ジュダの復活

深夜。私はヒナギクさんの部屋へ静かに入り、彼女が眠るベッドに潜り込んだ。

「うん……？」

薄目を開けてこちらを見る。

「きゃあ！」

ヒナギクさんは驚いてベッドから落っこちた。

「何でハヤテくんが私のベッドに居る訳！？」

「一人が怖いんです。一緒に寝てくれませんか？」

私は目に涙を浮かべてヒナギクさんに強請^{ねだ}る。

「し、しょうがないわね」

ヒナギクさんがベッドに戻る。

「——って、やっぱり無理！」

ヒナギクさんが私をベッドから突き落とす。

「痛！」

「自分の部屋で寝なさい！」

私は渋々と自室へ戻りベッドに入って就寝した。

朝になり、目を覚ました私は着替えて洗面所で顔を洗い、キッチンへと向かうとヒナギクさんが朝食を作っていた。

「お早う。いつも作ってもらってるだけじゃあれだから今日は私が作るわ」

「裸エプロンをお願いします」

「却下。そんな恥ずかしい格好出来る訳ないでしょ」

「お願いします」

「……分かったわよ」

ヒナギクさんは裸になってエプロンを着用した。

（アーたん、お願いだからやめて）

「こうでいいかしら……？」

ヒナギクさんが顔を赤らめながら訊いてくる。

「口より手を動かして下さい」

「ハヤテくん、やっぱり変よ。お医者さんに行きましよう?」

「僕は至って正常ですよ」

「でも私の知ってるハヤテくんはそんなんじゃないわ。貴方、やっぱりハヤテくんじゃないんじゃない?」

「ななな、何を言ってるんですかヒナギクさん!? 僕は正真正銘のハヤテですよ!」

「嘘」

「何で嘘吐く必要があるんですか?」

「……まあいいわ」

ヒナギクさんは料理を再開する。

そこへお義母様がやってくる。

「ヒナちゃん、何その格好?」

「ハヤテくんがやれって言うから仕方なくよ」

「ハヤテくんってそんなことする子には見えないんだけど」

「お義母様、それはヒナギクさんが自分からやってきたんですよ」

「ちよつと、何吹き込んでるのよ!」

「何だか分からないけど、風邪引かないでね」

お義母様は食卓に着きテレビの電源を入れる。それと同時に怪獣出現のニュースを知らせるアナウンサーの声が聞こえ、次に杉並で暴れる怪獣の様子を上空から撮影した映像が流れる。

「大変だわ」

お義母様がこちらを見る。

私は頷くと言った。

「ヒナギクさんをお願いします」

私は玄関へ向かい、靴を履いて外に出ると現場へ急ぐ。

「待って天王州さん!」

後ろから着替えを済ませたヒナギクさんが追いかけてきた。

「……!」

今確かに私のことを呼んだような。

「天王州さんなんでしょ？」

私は立ち止まって振り返る。

「嫌だなヒナギクさん。僕がアーたんな訳ないですよ」

「隠さなくてもいいわよ。ミコノスで天王州さんがハヤテくんの体に入ってくの見てたんだから」

「何ですって！？　じゃあその後……」

「ええ、全部見てたわ。貴方がウルトラマンレオに変身するところも」

「……………」

「どうしてハヤテくんの中に？」

「ハヤテが死んだから」

「そんな！？」

シヨックを受けてその場に崩れるヒナギクさん。

「泣かないで下さい。僕はアーたんのお陰で何とか生きながらえますから」

「無理してハヤテくんを演じなくていいわよ」

「演じてなんかいませんよ」

「じゃあ二人で共有してるの？」

「はい」

「じゃあミコノスで私のこと好きって言うてくれたのはどっち？」

「僕ですよ」

「有り難う。それで、行くの？」

「ええ、街を守らなくちゃ」

「そう。なら行かせないわ」

「えっ？」

「私はジユダ。ウルトラマンレオ、貴方を抹殺する」

「……………！？」

ヒナギクさんの正宗による攻撃が当たり私は吹っ飛んだ。地面に転がる私。そこへ透かさずヒナギクさんの追撃。

「ぐわっ！」

吹っ飛ばされた私は地面を数回バウンドした。
徐に立ち上がってヒナギクさんを見据える。

「ヒナギクさんがジユダ？」

「アトランタ星人の時は上手く行くと考えたのにな」

正宗をカリカリと引きずりながら近付いてくるヒナギクさん。

「あれ演技だったの？」

「そうよ。まんまと引つかかってくれちゃって」

ヒナギクさんが眼前で正宗を振りかぶった。

「何か言い残すことは？」

「貴方はヒナギクさんの体を借りてるわけ？」

「それがどうしたのよ？」

「それを聞いて安心しましたわ。つまり、その体から貴方を引つ張り出せばいいだけのことです！」

私はヒナギクさんの頭に回し蹴りを浴びせて倒し、マウントで首を絞め上げる。

（そんなことしたらヒナギクさん死んじやうよ！）

「その子から出て行け」

（アーたん！）

『五月蠅いですわよハヤテ！ ヒナギクさんなら後で生き返らせま
すから安心しなさい！』

私は更に力を強める。

ヒナギクさんはもがき始めた。

やがてヒナギクさんは意識を失って動かなくなった。それと同時に
黒い光が彼女の体から出て行った。

私はヒナギクさんの首から手を離して彼女の体を揺さぶる。

「ヒナギクさん！ 起きて下さいヒナギクさん！」

「う……うん？」

意識を取り戻すヒナギクさん。

「ハヤテくん？」

ヒナギクさんは徐に起き上がって辺りを見渡す。

「日本？ 洞窟は？」

「何のことを言ってるんですか？」

「私ハヤテくんたちとミコノスに居た筈だけど……それより洞窟は？」

「洞窟？」

「ミコノスの海に洞窟があるのよ」

「もしかしてミコノス諸島の南側にあるアレですか？」

「そうよ。私そこでお札を破っちゃったの」

「あのお札を破るとジユダの封印が解けてしまうんですけど……って、元凶はヒナギクさん！？」

「ジユダって何よ？」

「その昔、宇宙を支配した帝王です。肉体を持たぬ精神体なので倒すことが出来ないため、ミコノスの洞窟に伝説のウルトラマンが封印したんです」

「じゃああの黒い光がそうなの？」

「黒い光？」

「うん、私がお札を破ったら出て来たの。それでその光が私の体を包んで、気が付いたらここに居たって訳なんだけど」

「何で破ったりしたんですか？」

「立て札があって、封印の札を剥がすべからずって書いてあったからよ」

「何やってんですの貴方は！？ 貴方のせいでジユダが復活してしまいましたですわ！」

「ごめん。ていうかその喋り方、天王州さんに似てるんだけど」

「あー！」

私は口を手で覆った。

「ハヤテくん？」

「ああ、あの、ヒナギクさんって好きな人居ないんですか？」

正体を知られる危険があるため話題を変える。

「えっ？」

突然の質問にヒナギクさんは頬を赤らめた。

「……………」

無言で私を見つめる。

私はもう分かつてる。ヒナギクさんはハヤテにぞっこんだ。

「ヒナギクさん」

「はい？」

「僕と婚約しませんか？」

（はい！？）

「は、ハヤテくん！？ それマジで！？」

「二年後に僕と結婚しましょう」

「……はい、喜んで」

私はヒナギクさんの口元へハヤテの唇を近付ける。

ヒナギクさんは唇を私に捧げた。

「じゃあ僕は用があるので失礼します。あと、ヒナギクさんと同居することになりましたから」

「うん。……ええ！？」

驚くヒナギクさんをよそに私は改めて現場へ向かう。

杉並にやってくると、街の一角は完全に崩壊していた。

サソリを彷彿させるアンタレスという怪獣が鳴き声を上げる。

「レオ——ッ！」

私は飛び上がると同時に変身してアンタレスにキックを浴びせる。
蹠跟めき遂に倒れるアンタレス。

「いやあっ！」

私は構える。

アンタレスは立ち上がり、私にストレートを二発放った。

私は左右の手の平で二つの拳を受け止めた。

「それはフェイクだ」

「何！？」

先端に毒針が付いたアンタレスの尻尾が私の背中に突き刺さった。

「ぐわっ！」

毒を食らって体が麻痺しその場に倒れる。

アンタレスは地面に穴を掘り潜っていった。

敗北した私は気を失い、意識が回復するとハヤテの姿でヒナギクさんの部屋のベッドで横たわっていた。

「気が付いたみたいね。大丈夫？」

「ヒナギクさんが助けてくれたんですか？」

「偶然テレビの中継に映ってね。毒に冒されてたから解毒しておいたわ」

「有り難う御座います」

「れ、礼なんか言われても嬉しくないわよ」

ヒナギクさんは頬を赤らめながら顔を逸らした。

「——とか言って本当は嬉しいんですね？」

「五月蠅いバカ！」

ヒナギクさんがハヤテのお腹を思いつ切り叩いた。

「がはっ！」

「ハヤテくんなんか知らない！」

怒って部屋を出て行くヒナギクさん。

（どうするんだよアーたん？ ヒナギクさんに嫌われちゃったじゃんか）

『大丈夫ですわ。あれはただ照れてるだけですから』

（何で断言出来るんだ……）

階段を上る足音。

『ヒナギクさんのですわ』

足音は部屋の前で止まり、扉が開いてヒナギクさんが入ってきた。手元にはおじやの入った皿がある。

「おじや作っただけで食べる？」

その問いに答えてハヤテのお腹が鳴った。

私は徐に体を起こした。全身が痛い。

「食べさせてあげるわね」

ヒナギクさんがおじやをスプーンで掬い取る。

「はい」

私は口を開けるとヒナギクさんが放り込んだおじやを咀嚼して飲む。その繰り返し作業でおじやは空になった。

「じゃあお休み」

そう言っ出て行くヒナギクさん。

私は横になると目を瞑った。

やがて私は夢の世界に入った。

どこかの教会で牧師が喋っており、その前にスーツを身に纏ったハヤテ姿の私とウエディングドレスを着飾ったヒナギクさんが立っていた。

「汝、如何なる時も、妻ヒナギクを愛すると誓いますか？」

「誓います」

「汝、如何なる時も、夫ハヤテを愛すると誓いますか？」

「はい！」

「誓いのキスを」

私はヒナギクさんとキスをした。

「おのれ綾崎——っ！」

その声と共に現れたのはハヤテのクラスメイトの東宮^{あすまみや} 康太郎^{こうたろう}だ。

「よくも俺の桂さんを！」

「何言ってるんですか！？ ヒナギクさんは僕のもんです！」

「ならばお前を倒して桂さんを奪うまでだ！」

舞台が教会から空き地へと変わり、東宮くんが攻撃を仕掛けてきた。

「天王州さん、負けたら東宮くんと結婚するからね」

「ヒナギクさん、僕はハヤテですけど？」

「ハヤテくんの格好をした天王州さん、でしょ？」

何で知ってるんだ？

「隙あり！」

「ぐわっ！」

ヒナギクさんに気を取られていて東宮くんの攻撃に気付かず拳を一つ食らって後方へ吹っ飛んだ。

私は空中で頭を真下にすると同時に両の手の平を地面に着けて跳ね上がり体を反転させて降り立つ。

「はあっ！」

東宮くんが二つの拳を放ってきた。

私は両手でそれぞれを受け止める。

「今のはフェイクだ」

東宮くんのお尻に生えた毒針付きの尻尾が私の背中に迫る。

私は足を振り上げて逆立ちをするとキックスライサーで尻尾を切り落とし、足を降ろすと同時に相手の拳を放してバク転で距離を取った。

「ウガー！」

東宮くんがアンタレスに変身すると同時に私は目を覚ました。

「これだ！」

起き上がる私。

「どうしたのいきなり？」

机で勉強していたヒナギクさんが振り向いた。

「いえ、サソリ怪獣の攻略を見つけただけです」

「そう」

時計を見るヒナギクさん。

「もうこんな時間ね」

机の上の道具を片付け、欠伸をして立ち上がり、ベッドへと潜り込んでくる。

「ヒナギクさん！？」

ヒナギクさんが身包みを剥がしてくる。

「えっ！？ ちょっと何するんですか——っ！？」

私のハヤテがヒナギクさんの玩具からたにされる。

「気持ちいい？」

「はい、とっても。上手なんですネ」

私とヒナギクさんは交尾をしていた。

やがて日が昇り、朝を迎える。その頃にはヒナギクさんは裸のまま私の上で気持ちよさそうに眠っていた。

「ヒナちゃん、朝よ！」

お義母様が部屋に入ってきて私たちの恥ずかしい姿を見据える。

「あらま」

お義母様は微笑を浮かべて部屋を出て行った。

私はヒナギクさんを起こさぬようベッドからそつと抜け出す。

先ほどのヒナギクさんはかなり激しく、とても気持ちよくて何度もイカされた。

（ねえ、アーたん）

『何ですの？』

（ヒナギクさん妊娠しちゃうんじゃない？ ダメだよそんなの）

『どうして？』

（僕の子はアーたんに産んでもらいたい）

私の気持ちに応えてハヤテの頬が赤らむ。

『貴方と私が分離出来たらね』

私は立ち上がり、部屋の中を物色した。

物音でヒナギクさんが目を覚ます。

「ちよつと人の部屋で何やってるのよ！？」

「バスタオルを借りようと思って」

「タオルなら自分のを使いなさい！」

「ヒナギクさんも入りますか？」

「何で男の子と一緒に入らなきゃいけないのよ？」

「別にそんなことは言ってますが、入りますか？」

「誰が貴方なんて！」

私が振り返るとヒナギクさんは顔を真っ赤にして湯気を出していた。

「ヒナギクさんが激しくするから僕たちヌルヌルです。一緒に入りましょう」

「こ、今回だけよ。後から行くから先に入ってなさい」
「有り難う御座います」

私は自室に行き、バスタオルを手に風呂場へ向かう。
シャワーで全身を濡らし、頭をシャンプーで洗っているとヒナギクさんが入ってきた。

ヒナギクさんは無言で全身をシャワーで濡らすと頭を洗い始めた。
「ねえ、ハヤテくん」

「何ですか？」
シャンプーをシャワーで頭から落とす。

「男の子だったら何て名前を付ける？」

「考えてないです。女の子なら候補があるんですけどね」

「へえ、どんな？」

「ハルナですよ」

「可愛い名前ね」

ヒナギクさんがシャワーに手を伸ばす。私は蛇口を捻った。

「有り難う」

桃色の長い髪からシャンプーを落としシャワーを壁に引っかける
ヒナギクさん。

私はシャワーを止め、手拭いをカランで濡らして石鹸を含ませ泡
立たせる。

「ところでその指輪は何？」

「アーたんからもらったお守りです」

「ちょっと見せて」

ヒナギクさんがハヤテの左手を手繰り寄せてレオリングを見据え
る。

「格好いいじゃない。私も欲しいわ。どこで売ってるの？」

「それは世界に一つしかありません」

「じゃあちょうだい」

ヒナギクさんが薬指からレオリングを外した。

「ダメですよ！ 返して下さい！」

振り返り様にレオリングの奪還を試みると、私は石鹼を踏んづけてひっくり返し、それを見たヒナギクさんがお腹を抱えて笑い出した。

「ハヤテくんってドジね」

「指輪返して下さい。それが無いと大変なことになるんです」

「どう大変なことになるのよ？」

「怪獣や宇宙人が現れた際にウルトラマンレオが戦ってくれませんか？」

「大変なことになるわね。あれ？　ということは、ハヤテくんがウルトラマンレオなの？」

「そういうことになります」

ヒナギクさんは残念そうな顔でレオリングを返却してくる。

「何か地球の命運がかかっているみたいだから返すわ」

私はレオリングを左手の薬指にはめる。

「それより、何で負けるのよ。油断しすぎなんじゃない？」

「すみません」

「まあいいわ。背中流したげる」

「いいですよ。そのぐらい自分で出来ますから」

「私が流すって言うてんだからやらせなさい」

私はヒナギクさんに手拭いを渡した。すると彼女が背中をゴシゴシと擦ってくる。

「ハヤテくんは幼馴染みのことはいいの？」

「いいんです」

「どうして。十年も思い続けた人なんでしょ？」

「実はミコノスで再会したんですけど、振られてしまって」

「……そっか。けどハヤテくんを振るなんてどんな子なのかしら？」

「白皇の現理事長」

「天王州さん？」

「はい」

「確かに彼女には近付くことさえはばかられるわね」

「ヒナギクさん、背中のもういいです」

私は手拭いを受け取りハヤテの体を擦る。

やがて全身が洗い終わり、シャワーで石鹸を綺麗に流す。

「じゃあ僕は上がりますね」

私は一足先に風呂を出て体を拭き、自室で着替えを済ませた。その直後、お義母様が入ってきた。

「アテネちゃん、さっきの怪獣が現れたわ」

「行ってきます」

私は家を飛び出した。

4・アーたん、ハヤテになる

練馬の街で暴れ回る怪獣アンタレス。逃げ惑う人々。私は人混みを掻き分けてそいつに接近していた。

「君、そっちへ行つてはダメだ!」

住民を避難誘導させていた男性警察官がハヤテの腕を掴んで私を止めた。

「放して下さい! 僕は行かなくちゃいけないんだ!」

「行つても死ぬだけだぞ!」

私は振り返り様に警察官を睨め付けた。それと同時に彼の目が輝く。

「中に入つてるのか?」

「……!?!」

私は驚いた。ハヤテに乗り移つてることを一目で見抜かれたからだ。

「貴方は?」

「私はM78星雲の恒点観測員三百四十号だ。君は何者なんだ?」

「L77星から来た通りすがりのヒーローです」

「アバウトな解答だな。だが素人を行かせる訳にはいかない。ここは私に任せろ」

彼はそう言うのと辺りに誰も居ないことを確認して懐から蔓の無い赤い眼鏡を取り出した。

「ジユワ!」

蔓の無い赤い眼鏡を目元に近付けると、彼はそこを起点に赤い体に白いラインの入った人ならぬ者へ姿を変えた。私はその人物を知っていた。

「師匠がどうして地球に!?!」

彼の名はウルトラセブン。惑星軌道図を作る際にL77星に立ち寄った時、私に戦いのイロハを教えてくれた光の国の宇宙警備隊の

一人だ。

「お前はレオか？」

「お久しぶりです、師匠！」

「挨拶は後だ！」

セブンは巨大化するとアンタレスに挑んだ。

アンタレスが迫り来るセブンを両手で押さえ付け、背中に尻尾を突き刺す。

「ぐわっ！」

毒を食らい倒れるセブン。

「くっ……！」

ふらふらとした様子で立ち上がって身構えるセブン。

「レオ——ッ！」

私は飛び上がって変身すると、アンタレスにキックを浴びせて倒した。

「師匠、大丈夫ですか！？」

「なぜ変身した！？」

「師匠が殺られるのを黙って見てられなかったんです！」

私は立ち上がったアンタレスに向かっていく。

「奴の尻尾に気を付ける！」

「はっ！」

私は二つの拳を放った。

アンタレスは手の平で二つの拳を受け止める。

「それを待ってたんだ！」

私はその場で逆立ちをすると、迫り来るを尻尾をキックスライサ

ーで切り落とし、足を下ろしてバク転で後退する。

「よくも俺様の尻尾を！」

怒ったアンタレスが猛攻を仕掛けてきた。

「くっ……！」

素早い攻撃に手も足も出ない私。次第に追い詰められていく。
「ハヤテくん、これを使って！」

地上から聞こえるヒナギクさんの声と共に正宗が飛来した。

私は掴み取った正宗を超能力で巨大化させてアンタレスを斬り付ける。

「ぐわっ！」

アンタレスの体から血飛沫が上がる。

「貴様にもジユダが絡んでるのか!？」

「そうだ。ウルトラマンレオ、お前は強い。だからジユダ様はお前を気に入っている。俺と共に来い」

「断る」

「何!？」

「俺が貴様らの野望に加担する訳がないだろ」

「そうか。ならば貴様は殺す」

「殺されるのはお前の方だ!」

私はアンタレスに切りかかった。

ひらりと身をかわすアンタレス。

「お前の攻撃は威力はあるが速度が遅い!」

背後に回り込まれ、蹴り飛ばされる私。

「ジユワ!」

瀕死のセブンがウルトラ念力でアンタレスの動きを封じる。

「何だこれは!？ 体が!」

「今だレオ! 必殺技を叩き込め!」

落下する私は地面に手を着いて跳ね上がり、反動ジェット袋を使って上昇し、アンタレスにレオキックを叩き込んだ。

セブンがウルトラ念力をやめると同時にアンタレスが倒れ爆発して辺りにその肉片が飛び散る。

私は右手の正宗を元のサイズに戻して地上のヒナギクさんに返却した。

「うっ……!」

セブンが等身大になり人間の姿に戻って気を失う。

「師匠!」

私はすぐさまハヤテに戻ってセブンである男性警察官の下へ駆けつける。

「セブン！ 師匠！」

私は彼の体を揺さぶるが、しかし彼は目を覚まさない。

「ハヤテくん、今救急車を呼んだからもうじき来るわ」

三分後、シーソーシーソーとサイレンが聞こえ、救急車が現れた。救急隊員が彼を担架に乗せて救急車へ運び込む。

彼は救急車で近くの病院へ搬送された。

「ヒナギクさん、少し地球を離れます」

「どこまで行くの？」

「M78星雲です」

「遠いわね」

「それと、この体は置いていきますので、戻ってくるまで保管して下さい」

「置いてく？」

私はハヤテを脱いだ。

「天王州さん！？」

ドサリと倒れるハヤテの体。

「どういうこと？ ハヤテくんは着ぐるみだったの？」

「ハヤテは歴とした生命体よ。今は死んでるけど」

「死んでる？」

「ミコノスで怪獣に踏みつぶされたの。私は彼を生きながらえさせるために中に入っていたのよ。という訳でハヤテのこと、お願いしますわ」

私はそう言うと、変身して飛び立った。

ハヤテ、貴方に新しい命を持ってきますわ。

「……？」

宇宙空間に飛び出すと、宇宙鶴のローランと出会った。

「ローランじゃないか。こんなところで何をしてるんだ？」

「久し振りね、レオ」

「前に逢ったのは一万年前だったか」

「月日が経つのは早いものね」

「それで、何してるんだ？」

「貴方に助けてもらおうと思って」

「……？」

「私の星がマグマ星人に襲撃されたの」

「何？」

「それで星は崩壊したわ。付いてきて」

「私はローランと共に荒れ果てた何もない惑星へやってきた。

「酷いな……」

「アイツのせいでパパもママも死んでしまったわ」

「ローランはその場に泣き崩れた。

「よし分かった。俺がそいつらに天誅を下してやろう」

「本当！？」

「ああ。両親の仇は取る」

「有り難うレオ」

「私はローランと共にマグマ星へ向かった。

「溶岩に覆われた灼熱の星。ここに凶悪なマグマ星人が棲んでいる。

「くっ……！」

「カラータイマーの点滅と共に私は膝を着いた。

「どうしたの？」

「エネルギーを消耗しすぎた。俺たちウルトラ戦士はディファレー

「ターを浴びなければこの姿を保てないんだ」

「いいことを聞いたわ」

「へ？」

「ローランがいきなり攻撃を仕掛けてきた。

「とっさに避ける私。

「何するんだ！？」

「まんまと引つかかったわね」

「何！？」

ローランはババルウ星人に姿を変えた。

「貴様は！」

「約束通りレオを連れてきてやったわ！」

その言葉と共に大勢のマグマ星人が現れる。

この数ではいくら私でも太刀打ち出来ない。

「俺たちと一緒に来い」

私は様子見を兼ねて彼らについて行く。

「入れ！」

私は牢獄へと放り込まれた。

「その牢屋の中にはディファレーターが放たれてる。死なれては困るからな」

「そんなことして大丈夫なのか？」

「この牢屋の鉄格子はマグマチックチェーンと同じ素材だ。そう簡単に破れるとは思えんがな」

マグマ星人は扉を閉めて鍵をかけた。

「兄さん？」

聞き覚えのある声に振り返ると、左足にマグマチックチェーン枷が巻かれたアストラが壁に寄っ掛かる形で座っていた。

「僕も兄さんの偽物に騙されて捕まってしまったよ」

「よしアストラ、腹痛になれ」

「僕たち食べないよね？」

「そうだったな」

私はアストラの横に腰をかける。

「そうだ！ 兄さんならここを抜け出せるんじゃない？」

「どうやって？」

「地球人に擬態するんだよ。彼らのサイズならあの鉄格子の間を潜れる」

「それグッドアイディアだぜ」

私は鉄格子の前まで行き、天王州 アテネに変身する。

「何で女の子？」

「これが私の本来の姿なのよ」

「じゃあ兄さんは？」

「アストラ、いい子だからそこで待っててね？」

私は牢屋を抜け出し、幾つもの鉄格子の部屋が並ぶ廊下を進む。

「おやおや、どちらへ行くのかな小人さん？」

声と共に背後に気配。

立ち止まり様に恐る恐る振り返ると、胸部にカラータイマーを付けた全長五十メートル前後の赤い体の男が私を見下ろしていた。腹部にはしと7を合わせたようなサインが描かれている。

「お義父さん！？」

彼の名はウルトラマンアルス。レオの実父で777星を治める王様だ。

「777星はマグマ星人に降伏した」

「何ですって！？」

「仕方が無かったんだ。お前たちを人質に取られたからな」

「宇宙警備隊への救援要請は！？」

「光の国は今それどころではないんだ。ベリアルという悪のウルトラマンが宇宙牢獄から抜け出してプラズマスパークタワーのコアを奪ったんだ。そのために光の国は氷河に覆われてしまった」

「兎に角、この星を制圧しましょう。リーダー格さえぶっ倒せば何とかなりますわ」

「大丈夫なのか？」

「彼ならこういうでしょうね。俺に任せてくれ、と」

「……お前を信じよう」

「おい、何をしているアルス？」

その声にお義父さんが後ろを振り向いた。その先にマグマ星人が立っている。

「食らえ！」

お義父さんがマグマ星人に光弾を放った。

「ぐわっ！」

怯むマグマ星人。

「貴様、我々に刃向かう気が!？」

「刃向かってやるさ」

「ならば貴様を叩きのめして逆らえないようにしてやる」

マグマ星人がサーベルでお義父さんに攻撃する。

「くっ……!」

突かれた力所を押さえるお義父さん。

「ひゃっはー!」

マグマ星人がお義父さんの顔面を殴り、腹部に膝蹴りを叩き込む。

「がはっ!」

お義父さんはお腹を押さえてうずくまった。

「レオ——ッ!」

私はそう叫び変身した。

「父さん、ここは俺に任せて」

「貴様、どうやって脱獄した？」

「地球人に姿を変えればあんなところ簡単に抜けられるぞ」

「そうか。だが残念だったな。今度はガラスケースに閉じ込めてやる」

「その前に貴様を殺す」

「やってみろ」

私とマグマ星人は互いに構えた。

マグマ星人の先制攻撃をかわし、カウンターを浴びせて怯ませる。

「おら!」

手を組みマグマ星人を床に叩きつける。

「ぐわっ!」

「やめだ」

「何!？」

「レオ!？」

私はマグマ星人を見下ろして言う。

「お前を殺すのはやめだ。立て」

私は足下のマグマ星人を無理矢理立ち上がらせる。

「お前には反乱を起こしてもらう」

「お前の言うことなど聞くものか……！」

私はマグマ星人の向きを変え、彼の右手に自分のそれを重ねる。

「俺は師匠に他の生物への憑依方法を教わったことがある。その方法でお前の体に乗っ取ってやる」

「やめろ！」

怯えるマグマ星人。しかし私はその体内に侵入して肉体の主導権を奪い取った。

『首領はどこに居る？』

（お前なんかに教えてたまるか）

「父さん、俺に光線を――」

（待て！ 言う、言わせて下さい！ 首領はこの先の司令室に居ます！）

私は司令室に向かって歩き出した。

途中、通りかかったアストラが閉じ込められている牢屋の前で、私は彼にVサインを送った。

「兄さんなの！？」

「ああ。今からこいつで反乱を起こす。それまでの辛抱だ」

私はそう言うのと再び歩き出した。

やがて前方から別のマグマ星人がやってくる。

「大変だ！ レオが脱走した！」

「何！？ 確認してくる！」

マグマ星人はアストラが閉じ込められている牢屋へと駆けていった。

（その扉です）

私は司令室と思しき入り口のドアを開けた。その先には冷凍星人グローザム。この星も制圧されていたようだ。

「失礼します」

「何の用だ？」

「あんたが首領だったのか、グローザム」

「何者だ？」

私はマグマ星人の体から抜け出た。

「久し振りだな。なぜ俺を捕らえた？」

「地球にお前の居場所を無くすためさ」

「何！？」

私は立ち上がろうとしたマグマ星人の頭を踏みつける。

「今頃ババルウ星人がお前に化けて地球に向かっているところだろ」

「貴様！」

私はグローザムに襲いかかった。

「よせよせ、親友じゃないか」

「くっ……！」

既のところで攻撃を止める。

私がグローザムに出逢ったのは十年前だ。

あの日、地球にやってきた私は、金髪縦ロールの少女に姿を変え、東京の町を彷徨さまよっていた。

「お嬢ちゃん、おじさんと遊ばない？」

私は目の前に現れた男を無視した。すると男が私の鼻に布をあてがった。

「……！？」

布にはクロロホルムが含まれていたらしく、それを嗅いだ私は気を失い、目が覚めるとどこかの廃墟の一室に居た。

私は誘拐されたのだと直ぐに分かった。

手には逃げ出されないように手錠をかけられ、剥き出しになっている排水管に繋がれていた。

部屋の扉が開き、先ほどの男が入ってきた。

「目が覚めたようだね、お嬢ちゃん」

「私を監禁してもお金は手に入らないわよ」

「身代金ではない。君をおじさんの言うなりになるよう調教するんだ。そして大人になった君と結婚する」

「成る程。その顔だから女には相手にされなかったのね。それで気に入った幼女を誘拐して手懐け、何でも言うことを聞く自分の理想の女に育て上げる。見苦しいですわよ貴方」

私がそう言うのと男の額に青筋が浮かんだ。

「貴様！ 餓鬼だからってなめんじゃねえぞ！」

「貴方みたいな汚い人は舐めませんわ」

「ほお、そんなに痛い目にあいいたいかな」

男は拳を私の顔面に放とうとした。しかし、それは既のところで止まってしまった。

「体が凍ってく！？」

身動きが取れなくなった男は見る見る内に全身が凍結していく。

男の背後に冷凍星人が現れた。

「消えろ」

冷凍星人が凍り付けになった男を横へ吹っ飛ばすと、それは壁に当たると同時に粉々に砕け散った。

「大丈夫か？」

「貴方は？」

「俺はグローザム。町でお前を一目見て、その、惚れちまったんだ。だから助けに来た」 グローザムは手錠を破壊した。

「有り難う……御座います」

私はグローザムと共に廃墟を出た。

「お前、この星の生き物ではないな？」

「L77星人ですわ」

「そ、そうか。俺は冷凍星人だ。よろしくな」

「こちらこそ」

私たちは握手をした。

「ところでお前、名は何だ？」

「天王州 アテネ。アテネと呼んで下さいですわ」

「アテネか。いい名前だな」

それが私とグローザムの出逢いだった。

「レオ、ジユダ様の下へ来い」

昔のことを思い出していた私に目の前のグローザムは言った。

「……嫌だ」

「ならばアテネとしてはどうだ？」

「私はもうアテネじゃない！ 光の国宇宙警備隊所属のウルトラマンレオだ！」

「残念だ。お前とは友達でいられると思ったが、どうやら無理のようだな！」

グローザムはそう言う口から冷気を吐き出した。

「しまっ……！」

足が凍って動けなくなってしまった。

「お前を凍り付けにしてジユダ様の下へ連れて行く」

グローザムは冷気を吐いた。

ここまでか———そう思った刹那、私の前に光が現れて冷気をバリ
アで防いだ。

「なにやつ！？」

光が治まり、ウルトラマンマックスが現れた。

「助けに来たよ、アーたん」

「その声はハヤテ！？」

「マックスが僕に自分の命と体を貸してくれたんだ。君が危険に晒されてるってね」

「ええい！ 何者だ貴様！？」

「綾崎 ハヤテ。お前を倒す者だ！」

マックスがグローザムに襲いかかる。

「ぐおっ！」

マックスの素早く重い攻撃に圧されていくグローザム。
グローザムの目が私に助けを求めた。

「やめろ——っ！」

私は振り返ったマックスの横顔を殴りつけた。

「アーたん！？」

驚き戸惑うマックス。

「グローザムを傷つけないで」

「けどこいつは……」

「友達なの」

「……分かったよ」

「グローザム、」

私はグローザムの眼前に移動した。

「貴方はどうしてジユダに加担するの？」

「あの方は死にかけの俺を救って下さったんだ。だから恩を返したい」

「そう。それが貴方の意思ね。けど地球を攻撃するのだけはやめなさい」

「だがそうしないとジユダ様に殺されてしまう……」

グローザムは怯えたような様子で言った。

「じゃあジユダを倒そう？」

「やはりお前とは仲良くはなれそうにないみたいだな！」

グローザムは拳を放った。

殴られた私は空中に弧を描いて吹っ飛び床に転がった。

「くっ……！」

立ち上がろうとする私。カラータイマーが点滅を開始した。

「ハヤテ、あいつを……」

マックスは頷くとグローザムに向かっていった。

そこで私の意識は途切れた。

気が付くと、私はヒナギクさんのベッドの上に居た。
傍らでヒナギクさんが私を見据えている。

「ハヤテは？」

「天王州さんを連れてきた後、マックスと別れてまた」

「アストラは？」

「それもハヤテくんが助けたわ。マグマ星は彼のお陰で壊滅したわ。それから、ハヤテくんは天王州さんに体をもらって欲しいと言ってたわ」

「どうして？」

「成仏したいんだって」

「そうですか」

「ハヤテくんの体ならそこに置いてあるから」

そう言つて部屋を出て行くヒナギクさん。扉の向こうで彼女の嗚咽が聞こえてくる。

私は起き上がると、ベッドを降りてハヤテの体の下へ行つた。

「ハヤテ、貴方は生き返らないでいいの？ 私に子どもを産んでもらいたいんじゃないの？ 大好きな私の側に居たいんじゃないの？」
しかしハヤテは私の問いには答えない。

「分かつたわ。貴方がそこまで言うなら、その体もらつてあげます」

私は最愛の人の体に入り込んだ。

部屋の外からは未だにヒナギクさんの嗚咽が聞こえてくる。

私は立ち上がると、部屋の扉を開け、泣いているヒナギクさんを後ろから抱き締めた。

「泣かないで下さい」

「……ハヤテくん？」

「神様にまだ死ぬなつて言われちゃいました」

「天王州さんが入ってるんじゃないの？」

「何言ってるんですか。僕の中には誰も入ってないですよ」

「そう。じゃあお帰りだね」

「はい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9549k/>

ウルトラマンレオ～私がハヤテですわ～

2010年10月11日19時36分発行